『徒然草』教材論
――道徳化からの脱却――

古久根　圭

一、『徒然草』の道徳化

国語教科書において定番教材と呼ばれる作品が存在することは自明なことであり、古典教育でもそうした状況は変わりないといってよい。本稿ではそうした定番教材の中から『徒然草』について考察していく。

『徒然草』は言うまでもなく古典教育の中の人気教材であり、現行の中学校国語教科書の全て、小学校でも過半数の教科書が、『徒然草』を採択している。さらに言えば、『徒然草』には定番教材だけではなく、定番章段の存在も見て取れる。序段は別にして、第五十二段「仁和寺にある法師」、第九十二段「ある人、弓射ることを習うに」、第一〇九段「高名の木登り」といったものがそれに当たる。例えば、第五十二段「仁和寺にある法師」は五社中四社が掲載している。採択の一番多い光村図書などは、序段とこの段しか掲載していない。しかし、こうした状況に問題が存在しているのも事実である。

考えなければならないのは、これらの段を教材として扱う場合、その「教訓性」や「過去の偉人の思想」に触れることに主眼を置いた、極めて「道徳性」の強い授業を行ってしまうことである。兼好法師の思考を見習うべきものと捉え、兼好の「ものの見方」や「考え方」を知ることを目標として、そこで止まってしまう傾向が存在するのである。

そもそも、『徒然草』に限らず、古典という作品にそうした要素を見出そうとする思想は根強い。例えば、改訂版学習指導要領中学校編「伝統的な言語文化に関する事項」第二学年の項には「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」という目標が書かれ

ている。それだけ古典において「作者」の「ものの見方や考え方」は重要視されているのである。

そして、こうした目標に沿うように『徒然草』は採択されていると考えることも出来る。何故なら、先ほどの目標が設定されている中学校第二学年において、すべての教科書が『徒然草』を掲載しているからである。

そうした意識があるからか、作者兼好法師の考えは、半ば見習うべきもののように姿を変え、「教訓性」を帯び、まるで道徳教材のようになってしまう。

しかし、当たり前のことであるが、古典教育は道徳の授業ではない。そして、古典に「教訓性」などの「先験的価値」は存在しない。古典に価値があるとすれば、学習者が古典と接していく中で立ち現われるものであろう。そうである以上、道徳化した『徒然草』の授業から脱却していかなければならないのではないだろうか。以下そうした形の古典教育を目指して考察を行っていく。

二、道徳化の現状及び関係概念としての古典教育という考え方

『徒然草』がまるで道徳の教材の様になってしまっていることは、前節で触れた。ならば実際にどういった形の授業として行われているのか。それを本節では指導案を例に確認していく。

斎藤真紀氏の実践は光村図書の教科書を用いて、中学校二年生を対象に平成二十二年に行われた実践である。斎藤氏は教材観として以下のように説明する（注1）。

> 「仁和寺にある法師」では、（中略）この作品のテーマは、一人旅ならではの失敗による人間のおかしさ、先達の重要性などは生き方の問題として、現代社会にも通用する人間観・人生観である。そこから、古典をより身近なものに感じさせ、時代を超えた生活の教訓があることを理解させたい

教材観として、既に「生活の教訓」の伝達を目標としていることがわかる。この段階で『徒然草』「仁和寺にある法師」の価値は先験的に決められてしまっていると言ってよい。実践中では、以下のような流れで授業が行われている。

・「仁和寺の法師の行動の部分」と「兼好法師の考えの部分」に分けて考えさせる
←
・仁和寺の法師の失敗の原因について考察させる。
←
・兼好法師が仁和寺の法師をどの様に捉えているか。ま

た、兼好法師が伝えたいことはなにか、考えさせる。（後者の例としては、「その場を知っている人と一緒に行動する・わからないことは人に尋ねなさい・何事も下調べが大事」などが挙げられている。）

←

・こうした話が、自身の経験にないかを感想として書かせる。また、次時の目標としては、「作品の教訓を読み取り、兼好法師の考え方にせまる」が設定されている。

実践中で、兼好の「ものの見方や考え方」を読み取ることが重要と考えられ、「教訓」を知る道徳的な授業になっているのがわかる。

これ以外にも、『徒然草』に「教訓性」を見出し、それの伝達を目指す授業は多い。例えば「古典から生きるヒントを」という単元名で行われた常盤佳子氏の授業実践では、古典教育の目標を次のように説明する。

生涯にわたって自分を支えてくれる「生きるヒント」を古典から得られる授業をしたいと考えるようになった。（中略）徒然草を学習教材とし、「古典作品」から「現代に通じる考え方」を学ぶ学習をという思いで本単元を考えた。（注2）

こうした実践に共通するのは、やはり古典に対して「先験的価値」を認め、そこに「生きるヒント」を見出していることである。確かに、そうした要素を『徒然草』に見出したい気持ちもわからなくはないが、もし「教訓」や「生きるヒント」を学ばせる授業を目指すのであれば、わざわざ古典を用いなくても、現代文の教材で行ったほうが生徒の理解も進むだろう。古典として時間をとって学習させるのであれば、古典教育、ひいては『徒然草』だからこそ存在する教育的意義を見出していかなければならない。

また、この作品に決まりきった教訓性を見出したのでは、生徒の読みというものは存在しなくなってしまう。あくまで生徒主体で、作品と接していくなかで、読みは生まれてくるものではないだろうか。そうしたことを踏まえた古典教育の形を考えることが重要なのである。

それらを考えていくため、本稿では、「関係概念としての古典教育」という考え方を参考にする。

古典が有していると考えられている「先験的価値観」を伝達することを目標とする「典型としての古典教育」と、学習者との関係性の中で古典の価値が表れてくるという「関係概念としての古典教育」という二つを区別し、定義づけているのが渡邊春美氏である（注3）。そして渡邊氏は古典に「先験的価値」を認めず、「関係概念としての古典教育」を推奨している。「道徳性」の強い古典教育からの脱却を考えるため、

これらについて簡単ではあるが紹介する。

まず、「典型としての古典教育」とは、「典型」や「規範」といった先験的価値に重きを置いている教育である。本節で扱った実践例が、典型化した「教訓・規範」伝達を主としていることから「典型としての古典教育」となっているのがわかる。

一方、渡邊氏の示した「関係概念としての古典教育」とは、学習者が積極的・主体的な読みを行うことで、個々の中に古典が立ち上がり、学習者の生活と精神は相対化され、認識、感動、示唆、指針、反省を新たにさせ、今日を生きる力となっていく教育であると渡邊氏は言及している。古典は読者である学習者が主体的な読みを行い、そうして生まれた読みから自己の相対化などを通して、価値を見出していくのである。そこには、実践例にあるような「先験的価値の伝達」や「教訓性」という考えは存在しない。あくまで生徒を主眼に置いた授業である。

また、「関係概念としての古典教育」という姿勢の背景には、古典に対して「価値も意義も、読み手主体がそれを発見し、引き出して、初めて存在する」という「関係概念としての古典観」が存在している。こうした考えは古典文学研究の分野において、古典作品の多くが「時代を超えて読み継がれた」ことや、「各時代において多くの人に受容された」という認識に対して、様々な日本古典作品の価値評価は時代によって作られてきたものであり、古典が時代を超えて読み継がれてきた、受容されてきたというものではないと、ハルオシラネ氏が明らかにしたことからも補強されるものであろう(注4)。

では次節から、「典型」的教訓譚から離れた読みを『徒然草』「仁和寺にある法師」を題材にして考えていきたい。

三、「仁和寺にある法師」注釈比較

本節では、先験的価値や教訓性、主題といった「典型」となっている考えから距離をとった、「仁和寺にある法師」の読みを考えていきたい。

そのために、まずは本文の注釈書解説や訳を確認する。細かく注釈を比較する作業を行い、知識を得ておくことが重要であるのは言うまでもない。それらを教える側が適宜学習者に示していくのである。そうした姿勢では、教師の読みに流されるのではないかという意見もあるとは思うが、様々な解釈を学習者が得ていくことでこそ、自身の考えとの比較や新たな解釈の発見など主体的な読みが行えると稿者は考えている。

以下、本文検討のため、本文を細かく引用し、その部分にかかわる注釈や考察をまとめていく。また、注釈も適宜省略していく。

参考にした注釈書は主に四種類である。永積安明氏が校注、

訳を担当している『方丈記　徒然草　正法眼蔵随聞記　歎異抄　新編日本文学全集44』（以下「全集」）（注5）。久保田淳氏校による『方丈記徒然草　新日本古典文学大系39』（以下「大系」）（注6）。木藤才蔵氏校注『新潮日本古典集成　徒然草』（以下「集成」）（注7）。そして、安良岡康作氏の『徒然草全注釈上巻』（以下「全注釈」）（注8）である。

①仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拝まざりければ

仁和寺にある：

・京都市右京区御室にある、真言宗御室派の本山。正徹本の「仁和寺になる法師」によるべきか。（全集）

・京の西、大内山の南麓にある。（大系）

・「に」は「にある」「にいた」などの意味に解することのできる助詞。（集成）

・この「に」は場所・位置を示す助詞。「ある」は「在る」。即ち、「仁和寺なる法師」と同じ意味である。宇多天皇が仁和四年（八八八）に建立された。（全注釈）

石清水：

・石清水八幡宮。京都府八幡市八幡坊の男山の山上にある。（全集）

・仁和寺から約二〇キロぐらいの道のりの所にある。（集成）

ここで確認しておきたいのは、仁和寺、石清水八幡が極めて、有名な寺社であること、そして両寺の位置関係である。

注釈にあるように、天皇が建立したことや、天皇がここで灌頂を受け住んでいたこと、平安後期には諸宗の最上位で権威を持っていたことなどを教えることで、学習者にもその特殊性は理解されるであろう（注9）。現在の仁和寺の様子を見ても、その大きさから、普通の寺社でないことはわかるはずだ。稿者が仁和寺を参拝した時も、その大きさや風格には驚かされた。写真などを用いて、そうしたことを学習者に感じさせたい。ただ、仁和寺は応仁・文明の乱などで焼失し、現在のものは適宜再建されていることは注意しておきたい。

また、両寺の位置関係も今後関わってくるのでしっかりと把握させたい。距離も「約二〇キロ」と決して短い距離ではない。こうした知識が後の「徒歩」という語句と結びついてくる。

②心うく覚えて、あるとき思ひたちて

心うく：

・情けない。（全集）

・残念に思って。石清水八幡宮は神仏習合が著しい社　だったから僧侶の参詣を拒むことはない。（大系）

・残念なこと。（集成）

・心うしと覚えて。「心うし」は、情けない。（全注釈）

学習者の中には僧侶が神社に参拝することを不思議に思うものもいるだろう。神仏習合に関する知識も、ある程度教える必要がある。

「心うく」の訳が「情けない」と「残念なこと」で違っていることも注意しなければならない。なんとなく流してしまいがちであるが「情けない」と「残念」では多少意味合いが違っている。この段階ではまだどちらか決めかねることもあると思うが、通読したのち、古語辞書と国語辞書を用いて、「心うく」と「情けない」「残念」といった日常語を対比させつつ、どちらがこの場面の心情として適しているか考えていきたい。そうした活動を通して、学習者の日常語に対する意識、より詳しく言えば無自覚に用いている言語に対する意識を変えていくような言語教育も行えるであろう。また、そうした活動が学習者をより主体的にさせ、読みの深化にも繋がっていくはずである。

また、古橋恒夫氏は法師が年寄るまで石清水を参拝しなかったことを「心うく」覚えていたことに注意している。そうした鬱積を早く払おうとしたあまり、「ある時思ひたちて」「ただひとり、徒歩より」出発するという独断的行為に走り、自身の失敗に気付かず、得意になって話す独りよがりな行為を生んだと指摘している（注10）。こうした指摘を踏まえれば、より「心うし」の訳の重要性も増していくだろう。

③ただ一人、徒歩より詣でけり。

徒歩より：

・徒歩で。「より」は動作の方法・手段を表す助詞。（全集）
・「より」は、手段方法を表す格助詞。（集成）
・この「より」は「にて」の意。（全注釈）

この部分は、現代語訳の比較では違いはあまり見られないが、この章段の解釈の上で極めて大きな意味を持っている部分である。この部分に関して詳しく考察したのが、安良岡康作氏であり、氏は当時の記録などを参考資料にしつつ、こう言及する。

「徒歩より」の句が、河船によらない徒歩による陸行の意であろうことは、この当時の交通状態から推して確かであると思う。そうすると、ただひとり、道づれも作らず、ひたむきに四里ばかりの道を歩き続けた老僧の姿がやや具体的に浮かんでくるし、それは「かたへの人」に語るひとりよがりとも結びついてくる。淀川を下る船中ならば、同じ八幡宮参拝者も同乗していたことであろう。そして、八幡宮が男山の山上に鎮座ましますことぐらいの予備知識を得ることもあったはずである。したがって「ただ一人」「徒歩より」の二つの句は、この僧の失敗を導き出す重要な要素をなしていたことになると思う。（注11）

安良岡氏は僧の失敗について、この「ただ一人」「徒歩より」という語句が大きな意味を持っていることを指摘したのである。

またこの表現が、失敗の要因を示していることを指摘したことと同様に、「徒歩」というのが僧の逸る思いを示す意図も含んでいたであろうことを示している。地図を示しながら、船旅をするよりも、陸路により直行したほうが、近道になるため、老僧はそれを選んだとしている。早く参詣したいという意識が、また僧の失敗を導いたとしているのである。

こうした考察とは違った見解を示したのが、稲田利徳氏の説である。

氏は特定の表現、「徒歩」という表現が用いられている意図を、『徒然草』と、同様な表現を有する他の作品も視野に入れ、「伝統や当代社会のなかにおけるその表現に対する共通感情、共通認識を探りあて、それを「徒然草」の表現とかかわらせて」考察していった（注12）。

この表現に関して、まず、稲田氏は三木紀人氏の注釈を参考にして、陸路も船も、船による省力を除けば、時間的にあまり差はなく、老僧があえて、負担の多いほうを選んだと考えるほうが妥当であると説明する。そして僧が、より負担の多い陸路を選んだ理由は、その信心からであるとしている。

稲田氏は、その説を裏付けるために、「今鏡」や「無名抄」の「徒歩より詣ず」を引用し、こうした作品の中で「徒歩より」という表現が、「自らに労苦を課し、修行練苦によって神の霊験を得ることを期待しての行為」であることや、そうした意識が一般的なものであったことを示した。

これらをまとめて、「徒歩より詣でけり」の表現意図を稲田氏は以下のように考察する。

> 老法師が「徒歩より」参詣したのは、（中略）乗り物を利用せず、敢えて「徒歩より」参詣する行為を選んだのである。それはとりもなおさず、自分に辛苦を課すことによって、信仰の深さを示し、神の御利益を期待したためである。（中略）老法師の石清水八幡参詣が、単に、その建造物の壮観さやそれの鎮座する場所を物見遊山するためではなく深い信仰心によるものであったことは、「石清水を拝まざりければ」（中略）と参詣の姿勢を堅持し、かたへの人に対しても「尊くこそおはしけれ」と、（中略）尊厳さからとらえていることからも明瞭である。（中略）兼好が、この章段で、「徒歩よりまうでけり」に込めた表現意図、表現効果は、間の抜けた失敗に気付くことなく、得意げに八幡参詣の意義と満足とを「かたへの人」に語る老法師の滑稽さを倍加させるためであった。（注13）

稲田氏は、「徒歩より詣でけり」という表現に対して、「特

に船旅にこだわっていないし、ましてその行為が失敗を招く重要な要素であったなどと表現してはいない」と安良岡氏の説を否定し、あくまで「徒歩」という表現は、「信仰の深さ」、「神の御利益の期待」という点を強調するためであると説明する。そして、それは老法師の「滑稽さ」を強調する役目であったとしている。

安良岡氏、稲田氏の考察は学習者には難易度の高いものであるとは思うが、この部分の表現は作品の読みに大きくかかわってくる部分であることは明白である。訳もそれほど複雑ではないため簡単に終わらせてしまいがちの部分であろうが、しっかりと触れていきたい。

④極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。

極楽寺・高良：

・男山の麓にあった八幡宮付属の寺社。「高良」は高良大明神。

「極楽寺」は神宮寺、高良は摂社。（全集）

・「極楽寺」男山の東北麓にあった石清水別当寺。「高良」高良神社。男山の東北麓にある石清水八幡宮の摂社。（集成）

かばかりと：

・これだけのものと。（全集）

・これらだけと。（大系）

比較的、注釈書によっての訳のバラつきのない場面である。ここでも「神宮寺」や「摂社」など知識を要する場面であるので、先述した「仁和寺」の神仏習合と合わせて確認していきたい。

⑤さて、かたへの人にあひて

かたへの人にあひて：

・かたわらの人。朋輩、仲間。（全集）

・朋輩に向かって。「あひて」は向かっての意。（大系）

ここも注釈書にあまり違いは見られない。ただ、ここで用いられている「あひて」が「向かって」であり、「会って」ではないことは注意したい。偶然あった「朋輩」に話したのではなく、自主的に話していると考えられるからである。たまたま会った朋輩に話すのと、「朋輩」に面と向かってでは、印象も変わってくる。老法師が長年の願いがかなった参詣を、他人に伝えたかったという意思が垣間見えるためである。

⑥「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。

年ごろ思ひつること：

・長年の間、思っていたこと（全集）

・多年の念願を果たしました。（大系）

・この「思ひつる」は、長年の間、何度か思ってきたことを一括していったのである。（全注釈）

聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ：
・聞いていたにも勝って、まことに尊くあられました。（全集）
・噂に聞いた以上に荘厳でいらっしゃった。（体系）

ここで老法師が、賛辞を重ねれば重ねるほど、自身の失敗は大きなものになっていく。八幡宮を見ていないにもかかわらず、「荘厳」「尊い」という言葉を使って心酔する様は、その実、何も理解していない老法師の滑稽さを浮き彫りにしてくる。後半に用いられている強調の係助詞「こそ」も、尊さを強調しているのであるが、こうした強調も、八幡宮を見ていないにもかかわらず、心酔している老法師の様を強調することになり、滑稽さの強調へと繋がっていく。

⑦そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、何事かありけん。

そも：
・上を受けて、話題を一転し、下を新しく起こす接続詞。それにしても。（全注釈）

老法師の中で、石清水への参詣と、山へ登る人々が、まったくの無関係であると認識されていたことがわかる場面である。「それにしても」と一言で済ますのではなく、老法師が「話題」を「一転」させていることに注目したい。この段階で老法師は、実際に石清水八幡を参詣する人と遭遇していることになり、間違いに気付く機会を得ていたことを確認する必要がある。

⑧ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言いける。

ゆかしかりしかど：
・なんとなく知りたい、見たい。好奇心が持たれる意。（全集）
・知りたかったけれども。（体系）

本意：
・本旨。目的。（全集）
・本当の気持。本来の目的。（集成）

老法師は山の上に登る人々を見て、「好奇心」を持ち、なにがあるのか「なんとなく知りたい」と確かに思ったのである。もし、ここでこの気持ちを素直に表していたら、老法師は間違いを起こさず、石清水を参拝できたはずである。しかし、老法師は「本来の目的」を見失わず、その好奇心を信心によって打ち消したのである。

⑨少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。

先達：

・案内者。（集成）

・その道に達し、導きをする人。（全集）

「案内者」と「その道に達し、導きをする人」という二つであるが、前者は道案内などの単純な案内としているのに対し、後者はより広義の意味として捉えているのがわかる。この最後の一節は、教訓を読み取る道徳化に貢献している部分であろう。そうした場合、やはり単純に「案内者」としてではなく、後者の意味として「先達」を理解させることになる。

五、「仁和寺にある法師」にみる「嘆き」

ここまで、いくつかの注釈書や研究を比較検討しながら、本文を確認してきた。では、この作品をどう読み、どういった価値があると考えることができるのか。

少なくとも「仁和寺にある法師」を、「何事にも「先達」が必要」という教訓を教えるための教材として扱うのであれば、この作品である必要はないだろう。

例えば、この作品は滑稽譚として読むことも十分可能である。この章段は稲田氏が指摘したように、徹底した「信仰の深さ」「神の御利益の期待」を用いて、「滑稽さ」の強調を行っている。「徒歩」の表現に限らず、注釈を改めて見れば、「朋輩」に「あひて」に自身の経験を嬉々として語る姿や、全く違う寺を「荘厳」「尊い」として褒め称える場面、「好奇心」を持ちながらも、「本来の目的」のみを考え、間違いを正す契機を失う様子など、老法師は徹底的に滑稽な人物として書かれている。すべての仕組みが老法師を滑稽にさせているといっても過言ではないだろう。そうした考察を踏まえれば滑稽譚として捉えることは難しくはない。

しかし、再び考えなければならないのは、単なる滑稽譚で終わらせてよいのかである。この章段については、まだまだ考える余地はある。

重要なのは、老法師の信心が紛い物であったのかどうかである。もし、老法師が破戒僧であったり、物見遊山が目的であったりしたのであれば、これは単なる失敗譚で滑稽譚であろう。しかし、この老法師は先に示したように徹底的な信仰の深さが書かれている。それは滑稽譚の強調としての役割を持っていたのだが、ここまで徹底した信仰心の篤さは、最後の落ちで寧ろ悲劇的に作用するのではないだろうか。そう考えた場合、最後の一節は、ある種、嘆きの様にも取ることができる。そうした読みの可能性についてもう少し考察を加えたい。

まず、『徒然草』の他の章段から、深い信心を持つ者に対する兼好の好意的な評価が見て取れる。例えば、第四十七段

には、「養ひ君」の無事を祈るため、くしゃみをすると「くさめ」と唱えるまじないを愚直に繰り返す「尼」が登場する。兼好はこの「尼」に対して、「有り難き志なりけんかし」と感想を述べている。また、第六十八段には、大根の薬効を信じ食べ続けた「押領使」が、大根が化けた兵に助けられるという説話がある。この説話に対しても兼好は「深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ」と言及する。「尼」の場合も、「押領使」の場合も、信じている内容は滑稽なものである。しかし兼好は「有り難き志」、「かかる徳」と賛辞を贈っている。これは、いうまでもなく、両者の深い信心に対しての言葉であろう。

「仁和寺にある法師」について考えても、信仰心の篤さが感じられる。それは、「尼」や「押領使」の信心とは種類の違うものではあるかもしれないが、何かを信じている一途さという点では大きく違うものではないだろう。兼好は、この老法師の信心に対して、「尼」や「押領使」と同様、少なからず好感を持っていたのではないか。好意的な深い信仰心を持ちながら、または持っていたからこそ、間違いを正せなかった老法師の悲劇に対して、兼好は最後の一節で嘆いているのではないだろうか。信仰心が篤いからこそ、「徒歩」を選択し、信仰心が篤いからこそ「本来の目的」以外に目もくれなかったことが、失敗を招いているという悲劇は、深い信仰心に対して「有り難き志」を感じる兼好にとって、嘆くには十分過ぎるものであったのではないか。

この章段は、老法師の話で終わっており、「朋輩」やこのエピソードを聞いた人々の反応は全く書かれてはいない。その反応は、この章段を読んだ読者に委ねられているといってよい。この老法師に対してどういった感想を持つかは、学習者一人一人によって違うはずである。だからこそ、自分はどう反応するか、またどうして自分がそう反応したかを考える事が出来るはずである。こうして確認してきただけでも大別すれば、「教訓譚」「滑稽譚」「悲劇」という三つの可能性がある。また大別された中でも、細かく話を聞けば、そう感じる部分や理由は違うだろう。そうした理解を共有していき、自身の読みに反映させていくことが、この章段はできるのである。

「仁和寺にある法師」は、そうした多様な読みを許容するものであり、「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり」と言いつつも、老法師に対しての評価がなされておらず、評価が読者に任されているという特徴などからも、学習者との関係性の中で、読みを考えていくことの出来るものであると考えられる。だからこそ、教訓性に執心するのではなく、作品との関係性で様々な読みを創造していきたい。そうした創造された読みは、渡邊氏が言うように「学習者の生活と精神は相対化され、認識、感動、示唆、指針、反省を新たにさせ、今日を生きる力」を学習者に得させることになるだろう。

（注1）斎藤真紀「古典に親しむ「仁和寺にある法師」」(http://www.pref.saitama.jp/uploaded/attachment/483837.pdf)。
（注2）常盤佳子「古典から生きるヒントをI「徒然草」「中国古典の名言・名句」からI」『月刊国語教育』平成一九年第二十七巻。
（注3）渡邊春美「古典に対する興味・関心喚起の方略」『月刊国語教育』二〇一〇年十月、三十巻八号。
（注4）ハルオシラネ『創造された古典―カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、一九九九年。
（注5）神田秀夫・永積安明・安良岡康作校注・訳『方丈記 徒然草 正法眼蔵随聞記 歎異抄 新編日本文学全集44』小学館、一九九五年。
（注6）佐竹昭広・久保田淳校注者『方丈記徒然草 新日本古典文学大系39』岩波書店、一九八九年。
（注7）木藤才蔵校注『新潮日本古典集成 徒然草』新潮社昭和五十二年。
（注8）安良岡康作『徒然草全注釈上巻』角川書店、昭和四十二年。
（注9）総合佛教大辞典編集委員会『総合佛教大辞典』藏館二〇〇五年。
（注10）古橋恒夫「第五十一段～第六十段」『徒然草とその鑑賞I 徒然草講座第二巻』有精堂昭和四十九年。
（注11）注8と同じ。
（注12）稲田利徳『徒然草論』笠間書院、二〇〇八年。
（注13）注12と同じ。

（こぐね けい・本学大学院二〇一三年度修了）